

大阪市立大学生活科学部紀要・第45巻（1997）

パラノイド認知と原因情報が欲求不満事態の怒りと 攻撃に及ぼす影響*

後藤雄一郎***・倉戸ヨシヤ

The Effects of Paranoid Cognition and Information about Cause of Frustration on Victim's Anger and Aggression

Yuichiro Goto & Yoshiya Kurato

問題と目的

欲求不満事態の怒り、攻撃が「欲求不満—攻撃」説(Dollard, Doob, Miller, Mowrer, & Sears, 1939)¹⁾が主張するような必ずしも自動的なものではないということは、既に指摘されているところである。例えばRule, Dyck & Nesdale(1978)²⁾やDodge(1980)³⁾の研究によれば、被害が同一である場合、欲求不満をもたらす原因に関する情報の差異が攻撃反応に変化を及ぼすことが認められた。つまり被害者によってその原因が合理的と判断されれば、攻撃反応は生じにくく、不合理(arbitrariness)と判断されればその逆となることが観察され、原因情報の合理性の判断という認知過程が媒介していることが明らかとなっている。

その合理性の概念に関してAverill(1982)⁴⁾などの研究者らは「意図性(intentionality)」、「動機の正当性(justifiability of motives)」、「制御能力(controllability)」から成る三次元階層モデルが提唱した。被害者は原因帰属の認知過程において、まず最初に加害者に悪意があったかどうかを判断し、そしてその上で道徳的にその動機が正当かどうかということと、その事態を回避できる能力が相手にあったかどうかということとを判断することで、加害者の提供する原因情報の合理性を判断すると考えられている。つまりこのモデルでは、階層的に加害行動を以下のような四種類に分けることができる。

1. 意図的であり、かつ不当な理由によるもの。
2. 意図的であるが正当な理由によるもの。
3. 意図的でないが制御可能なもの。
4. 意図的でなく制御不可能なもの。

大淵(1982)⁵⁾はこのモデルを踏まえ、想像物語を用いて欲求不満がもたらす怒り、攻撃反応に及ぼす原因情報

の影響を詳細に検討した。また原因情報はモデルに対応するよう、1.自己中心的動機、2.服従への服従、3.怠慢、4.事故が採用された。その結果、1.原因の不合理性はより強い攻撃と怒りの感情を喚起する、2.合理的な原因情報は相対的に欲求阻止者の事態に対する制御能力を低く推測させ、結果への個人的責任をも軽減させるため攻撃反応が生じにくい、3.原因情報は欲求阻止者が被害者に対してあらかじめ持っていた態度の推測に利用され、攻撃量が決まる可能性が高い、ということが見いだされた。この結果は、ほぼモデルによる理論的推測と一致したものであった。

だが合理性の判断に関し、それを決定するための上記三要因の判断は、常に外的事実のみに依存して行われるわけではない。理由の正当性の判断には被害者の道徳的価値観が影響するであろうし、制御能力と意図性の有無の判断は、それぞれが対人認知の一要素と言える。特に相手がどう思っているかという他者の心の推測である意図性の有無の判断には、被害者の認知スタイルが影響しやすいと思われる。

例えばDodge(1980)は、意図性の曖昧な欲求不満事態において、攻撃的と評定された少年は、そうでない少年よりも強い攻撃反応を示すことを見いだした。さらにDodge & Frame(1982)⁶⁾によって攻撃的と評定された少年は、他の少年たちから攻撃を受けるよりもむしろ自分の方から攻撃を仕掛けていくことが多いことが観察されている。これらの研究より、Dodge & Frameは、攻撃的の少年が「自分は他者から敵意を向けられやすい」という認知スタイルを持っている可能性と、他者から敵意を向けられる事実が少年の攻撃行動に起因していることに着目した。そして彼らは攻撃的の少年の認知過程につい

*本研究は平成八年度大阪市立大学生活科学研究科修士論文を一部改変したものである。
***現所属：吉村病院

て次のようなモデルを仮定した。被害的な認知スタイルは、意図性の曖昧な状況において他者の意図を敵意的に解釈させ、少年の攻撃反応を喚起する。それに対し他者が報復的に反応することで少年は自分の予期が真実であったと思い、認知スタイルを強化する。つまりこの認知スタイルは、敵対的な対人関係を繰り返すことで徐々に助長される悪循環的なものと考えられた。

この対人認知の偏りを大淵(1984)⁷⁾はパラノイド(以下PAと略記)認知と呼び、この傾向の強い者をPA性格者と呼んでいる。また瀧村(1991)⁸⁾はPA認知を測定する尺度を作成した。そしてPA得点には性差があり、女性よりも男性のPA傾向が高いこと、しかし少年院入院者と一般の高校生のPA得点を比較したところ、尺度全体ではその条件差は女性にのみ認められ、高校生よりも女子入院者のPA傾向が高いことを見いだした。つまりPA傾向自体は男性の方が高いが、その犯罪実行への影響は女性の方が顕著であったと言える。この理由について瀧村は「しばしば指摘されるように、女子の非行者は男子の非行者に比べて、家庭内の葛藤が顕著で養護性が著しく低い場合が多い」と推測している。

PA認知は、対人場面において他者の敵意が自分に向けられやすいと感じる認知スタイルであるため、欲求不満事態において相手の意図性の判断に影響を与えるはずである。Bower(1981)⁹⁾の心的ノード(node)のネットワークモデルによれば、最初に注意の向けられたノードの活性化は周辺に結合したノードを自動的に活性化させる。つまり記憶情報が感情をプライミングしたり、逆に感情が記憶情報の再生をプライミングしたりする。このモデルを援用すると、PA傾向の高い者は不快情動のノードと他者の敵意を感じた記憶のノードとが直接的に結合しているので、一方の活性化は自動的に他方の活性化を促すと考えられる。つまり欲求阻止による直接的な不快情動は、他者との敵対的関係の記憶情報の再生を促進する。たとえ阻止者の意図性が曖昧であっても、PA傾向の高い者は不快情動ノードと敵対的対人関係の記憶ノードとの結合が強いので、判断には過去の記憶情報が優先して用いられ、悪意があると判断されやすいと推測される。

Berkowitz(1989)¹⁰⁾によれば嫌悪事象の知覚から不快情動の喚起までの過程は嫌悪事象の解釈によって媒介され、そこでは加害者の意図性や加害理由の正当性が判断される。さらに不快情動から攻撃反応に至る過程は攻撃の手段や強度を検討する制御的認知によって媒介され、そこでは社会的な罰の可能性、攻撃反応の適切さなどの判断される。PA認知が影響を及ぼすのは意図性の判断など嫌悪事象の解釈に対してであるから、PA認知は欲

求阻止による直接的な不快感情、すなわち怒りの感情を強めると考えられる。Berkowitzの攻撃モデルに従えば、攻撃反応は制御的認知によって手段を変えられたり、強度が弱められる可能性があるため、内面的な感情反応の方により影響すると推測される。

本研究ではこの仮説を検討するために、PA尺度とともに大淵の欲求不満物語による方法を変更して用いた。原因情報は、自己中心的動機、服従、無情報、事故の四つを選んだ。以下に大淵(1982)¹¹⁾によるそれぞれに対する説明を示す。

1.自己中心的動機：阻止者の身勝手な行動によって欲求が実現しないというもの。阻止者に加害意図はない。通常不合理と知覚される。

2.服従：阻止者が権威的な者の命令や強制に従うことで、欲求が実現しないというもの。通常合理的と知覚される。

3.無情報：原因は分からないままである。Dodge(1980)によれば、理由に関する情報が示されない場合、人は不合理な原因を推測しやすい。

4.事故：偶然の事故によって欲求の実現が妨げられる。通常合理的と知覚される。

また変更の際し下記の点が検討できるよう配慮した。

1.Dodge(1980)の指摘するように事態に関する情報が少ない場合にPA認知の影響は顕著に現れやすい。原因情報が与えられない場合、PA傾向の高い者はそうでない者よりも高い怒りの感情が喚起されると予想される。

2.通常合理的と判断されやすい原因情報に加害者の怠慢を感じさせよう要因(以下、これを挑発因と呼ぶ)を物語に付加することは事態を複雑化し、情報の統合をより困難にする。情報は提供されるが一貫性に欠けるため、相手の意図が曖昧である場合も、PA傾向の高い者は意図的に欲求阻止が行われたと判断すると考えられる。この要因を付加した原因条件では、挑発因による事態の曖昧さのために、PA傾向の高い者はそうでない者よりも強い怒りの感情が喚起されると予想される。この変更の詳細は方法にて述べる。(本研究では被験者が大学生であることを考慮し、PA認知が顕在化しやすいようすべての原因情報条件に同一の挑発因が含まれている。そしてさらにこの点を検討するために、服従条件に挑発因をもう一つ付加した。)

3.本研究で採用された原因情報は欲求阻止者の直接的な攻撃意図を含まない。PA認知は、その概念的な中核成分が他者への不信と被害感であるから、欲求不満事態の対人認知の諸過程において影響が現れると考えられる。PA傾向の高い者はそうでない者よりも、相手があらか

じめ自分を軽視していると判断したり、客観的な被害量は相手と同じであっても自分の方がより被害を被っていると判断すると予想される。

4. 欲求阻止者の事態への制御能力を高く判断した方が意図性も高いと判断しやすいと考えられる。そのためPA傾向の高い者はそうでない者よりも制御能力を高く判断すると予測される。

5. 瀧村(1991)の研究には既に触れたが、本研究でもおそらくPA得点の性差は見られるものと考えられる。またPA傾向が怒りの感情、攻撃反応に及ぼす影響に性差が見られるかどうかも含めて検討していく。

方法

1) 質問紙

a. PA尺度

PA尺度は高校生を対象に作成されており、「対人的猜疑心(18項目)」、「社会的猜疑心(5項目)」、「家庭への不満(5項目)」、「教師への反発(5項目)」、「近隣の孤独感(5項目)」、「仲間はずれ(5項目)」という6つの下位尺度から成る。本研究では、PA尺度の中核的成分である認知的な偏りを扱うため、また本研究での被験者が大学生であり、項目内容として不適切なものが含まれると考えられるため、「対人的猜疑心」、「服従猜疑心」の2下位尺度とPA尺度に付加されている社会的望ましさを測定する虚構尺度(9項目)を加え、5件法で施行した。得点は1点から5点で評定された。

b. 欲求不満物語

欲求不満事態の条件設定には、上記のように大淵の研究を参考に作成した想像物語を用いた。物語事態は、欲求阻止者(B子)が被害者(A子)の目的追求行動を阻止するというものである。

両者は大学生であり、連休を使っての北海道旅行を計画する。しかし出発当日空港にB子は現れず、A子がB子の自宅に電話しても誰もでない。また空港にB子からの連絡もない。結局A子は出発を断念する。そして後日、B子からA子は理由を告げられるという内容である。なお両者とも旅行に行くことができないという被害は同一である。また電話に関する点が各原因情報条件共通に付加された挑発因である。

原因情報条件は以下の4つである。

1. 自己中心的動機：「B子は、つきあっている彼からの電話で当日デートに行く。」
2. 服従：「B子は、以前から両親に旅行を反対されていたが、それをA子には告げずにいた。出発当日になっ

て、B子は両親と喧嘩になり空港に行けない。」大淵の先行研究ではこの原因情報条件の内容は、「B子は両親に反対されて、A子に旅行の中止を言い出す」というものである。この条件にのみ、「B子がA子に反対されていることを黙っている」という事態の曖昧さを増加させる挑発因をさらに付加した。

3. 無情報：「A子にはB子の来なかった理由がわからないままである。」

4. 事故：「B子は列車事故に遭い、空港に来れなかった。」

この質問紙では5項目の質問が7件法(1点~7点)で行われた。

質問1：「A子はB子にどのくらい腹を立てたと思うか。(以下この項目を「怒り」と略記)」

質問2：「A子はB子をどのくらい責めると思うか。(以下この項目を「攻撃」と略記)」

質問3：「B子がこの結果を回避できた可能性はどのくらいあったと思うか。(以下この項目を「制御能力」と略記)」B子の事態への制御能力を推定する項目である。

質問4：「B子はA子をどのくらい軽視していたと思うか。(以下この項目を「軽視」と略記)」B子のA子への先有態度を推定する項目である。

質問5：「A子とB子のどちらの被った被害が大きと思うか。(以下この項目を「相対被害」と略記)」知覚された被害感を測定する項目である。この測度では得点の高さは、A子の相対被害量の高さを表す。

2) 被験者と手続き

3つの大学の学生を対象に女性176名、男性210名の計386名に対して集団実施された。個々の被験者には、PA尺度と想像物語を一綴りにした質問紙が配られた。また想像物語では、上記の原因群のうちどれか一つによってランダムに条件設定を受けた。その結果、自己中心的動機条件群が女性55名、男性42名の計97名、無情報条件群が女性42名、男性55名の計97名、服従条件群が女性39名、男性55名の計94名、事故条件群が女性40名、男性58名の計98名となった。

結果

分析1) 原因情報の影響についての分析

a. 原因情報の影響についての結果

想像物語質問紙の各従属測度毎に性別(2)×原因情報(4)の分散分析を行った。2つの要因はどちらも個体間要因である。Table 1は各従属測度の平均値と原因情報

の主効果を示したものである。この主効果はすべての測度において有意であった。なお性別の主効果はすべての測度において非有意であった。多重比較にはDuncan法を用いた。

まず怒り測度では、各条件間すべてに有意差が見られ、

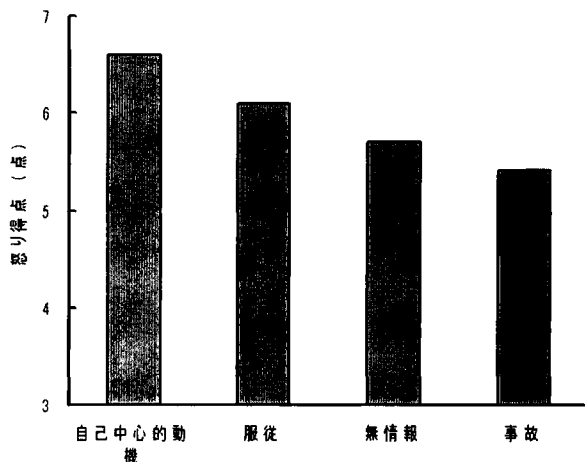


Figure 1. 各原因情報条件群における怒り測度の平均値

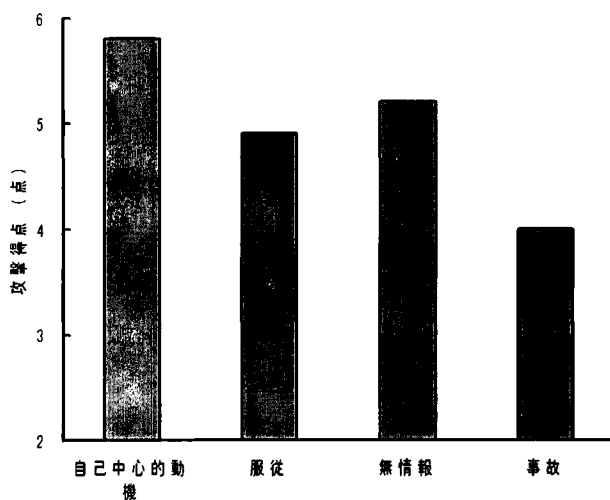


Figure 2. 原因情報条件群における攻撃測度の平均値

挑発因を付加した服従条件と他の条件間にも有意差が認められた。怒りが強く評定された順序は、自己中心的動機、服従、無情報、事故となった。

攻撃測度では、攻撃が強く評定された順序は自己中心的動機、無情報、服従、事故である。しかし服従条件と無情報条件との間では非有意であった。それ以外の各条件間では有意差が認められた。

Figure 1は怒り測度の平均点を、Figure 2は攻撃測度の平均点を示している。どちらの測度においても原因情報の影響が顕著であり、自己中心的動機条件の得点が最も高く、事故条件の得点が最も低いことがわかる。

制御能力測度では原因情報条件の主効果に加えて、交互作用が有意であった ($F(3,378)=3.73, p<.05$)。単純主効果の検定結果は、無情報条件における性別の効果 ($F(3,378)=8.83, p<.01$) が有意であり、男性の得点が相対的に高い。また男性における原因情報条件の効果 ($F(3,378)=12.84, p<.01$)、女性における原因情報条件の効果 ($F(3,378)=12.95, p<.01$) がそれぞれ有意であった。

原因情報条件についての多重比較にはTurkeyのHSD法を用いた。男性では、自己中心的動機、服従、無情報の3条件間には相互に有意差はなく、これら3条件と事故条件との有意差のみが認められた。前者3条件における制御能力の評価の方が後者よりも高い。女性では、自己中心的動機、服従の2条件間と無情報、事故の2条件間のそれぞれには互いに有意差は見られず、前者2条件と後者2条件間では相互に有意差が認められた。前者2条件の方が後者2条件よりも制御能力を高く評定されている。

Figure 3は性別毎の制御能力測度の平均値を示したものである。下位検定の結果で見たとおり、原因情報条件間において相対的に男性では事故条件の得点が低く、女性では無情報条件と事故条件の得点が低いことがわかる。

Table 1 原因情報条件における従属測度別の平均値、及び原因情報の主効果

従属測度	原因情報条件				F 値
	自己中心的動機	服従	無情報	事故	
1.怒り	6.62a	6.07b	5.66c	5.30d	$F(3,378)=23.42^{**}$
2.攻撃	5.74a	4.84b	5.14b	3.96c	$F(3,378)=28.07^{**}$
3.制御能力	5.57	5.74	4.65	4.01	
4.軽視	5.66a	5.12b	4.23c	3.67d	$F(3,378)=32.21^{**}$
5.相対被害	5.97a	5.71a	4.91b	4.91b	$F(3,378)=12.70^{**}$

** : $p<.01$

注) 平均値わきのアルファベットは、それらが同一であれば平均値間の有意差は見られず、異なるアルファベットが付された平均値間には有意差が見られたことを示す。また制御能力測度は交互作用が有意なため省略した。

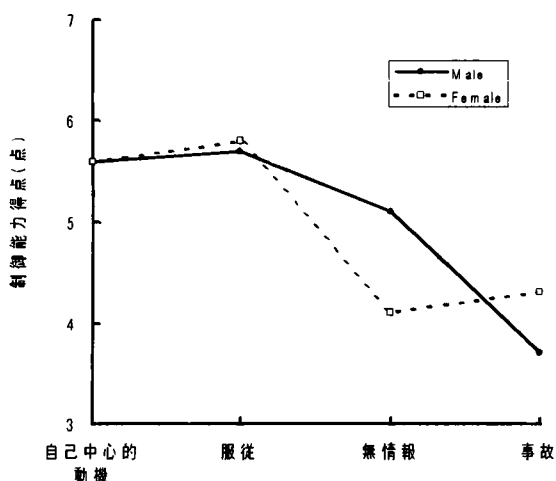


Figure 3. 制御能力測定の交互作用

また無情報条件では男性の得点が相対的に高いことが明らかである。

軽視測定では、すべての条件間において有意差が認められた (Table 1参照)。軽視態度を高く推測させた順序は、自己中心的動機、服従、無情報、事故となっている。

また相対被害測定においても、自己中心的動機、服従の2条件間と無情報、事故の2条件間のそれぞれには互いに有意差は見られず、前者2条件と後者2条件間では互いに有意差が認められた (Table 1参照)。前者の条件では、後者の条件よりも強い被害感が見られた。

分析2) PA認知の影響の分析

a. PA認知の影響についての結果

a-1. PA尺度における性差の検定

PA尺度の平均値は男性が70.41(SD=12.38),女性が64.97(SD=10.68)であった。また虚構尺度との間に相関($r(386) = .262$)が認められたため、虚構性を制御変数とした共分散分析を行った。その結果、性別の主効果が

Table 2 PA得点の高低条件と原因情報条件による各群の人数

		自己中心 的動機	服従	無情報	事故	計
Male	HighPA	22	8	18	22	70
	LowPA	19	18	25	20	82
Female	HighPA	15	24	12	18	69
	LowPA	23	27	28	17	95
計		79	77	83	77	316

有意であり、瀧村(1991)と結果と同様明らかな性差が認められた ($F(1,383) = 22.05, p < .01$)。

b. 角変換法による各従属測度の得点の検定

上記分析で明らかな性差が認められたため、以後の分析は性別毎に施行した。分析手続きは、まずPA尺度の得点を平均値から約0.5SDの基準でHighPA群とLowPA群に分別し、さらにPA尺度得点(2)×原因情報条件(4)の8群を形成した。性別毎の各群の人数をTable 2に示す。各群の人数のばらつきが大きいため、各従属測度の得点を質的変数に変換して分析を行った。

まず各従属測度の平均値より大きな値を得点した者の人数が、各条件群の全体の人数に占める比率を算出した。続いて、各測定毎に逆正弦変換法による2要因の比率の検定を行った。なおこの比率を以後、単に高得点者率と呼ぶ。原因情報条件についての多重比較はRyan法によって行われた。

b-1. 男性の結果

Table 3は男性の各群における従属測定毎の高得点者率である。またTable 4に原因情報条件毎の高得点者率と主効果が有意であった従属測度の多重比較の結果を示した。

比率の検定結果は、まず怒り測定では、原因情報条件の主効果が有意であった (Table 4 参照)。多重比較においては自己中心的動機と他の3条件間にも有意差が認められた。またPA得点条件の主効果も有意であり ($\chi^2 = 2.84, df = 1, p < .01$)、HighPA群の高得点者率はLowPA群よりも高かった。

Table 3 PA得点の高低条件及び原因情報条件における高得点者率

従属測定	HighPA				LowPA			
	自己中心 的動機	服従	無情報	事故	自己中心 的動機	服従	無情報	事故
1. 怒り	100.0	77.3	66.7	54.5	80.9	70.0	56.0	50.0
2. 攻撃	87.5	40.9	55.6	9.0	66.7	35.0	36.0	10.5
3. 制御能力	87.5	72.7	44.4	13.6	61.1	60.0	44.0	21.1
4. 軽視	62.5	81.8	61.1	40.9	88.9	40.0	52.0	26.3
5. 相対被害	100.0	63.6	61.0	59.1	88.9	60.0	48.0	10.5

Table 4 原因情報条件における高得点者率、主効果及び多重比較

	従属測定	自己中心 的動機	服従	無情報	事故	df	χ^2 値
1.怒り		90.5a	73.7b	61.4b	62.3b	3	27.73**
2.攻撃		77.1a	38.0b	45.8b	9.8c	3	40.31**
3.制御能力		74.3a	66.9ab	44.2b	34.7c	3	31.53**
4.軽視		75.7	60.9	56.6	33.6		
5.相対被害		94.5a	61.8b	54.5b	34.8c	3	46.16**

*:p<.05, **:p<.01

注) 平均値わきのアルファベットは、それらが同一であれば平均値間の有意差は見られず、異なるアルファベットが付された平均値間には有意差が見られたことを示す。また軽視測定は交互作用が有意なため省略。

攻撃測定では、原因情報条件の主効果が有意であった (Table 4参照)。高得点者率の高い順序は自己中心的動機、無情報、服従、事故であったが、無情報、服従との間では有意差は認められず、その他の条件間では認められた。

制御能力測定においても原因情報条件の主効果のみ有意であった (Table 4参照)。高得点者率の高い順序は、自己中心的動機、服従、無情報、事故である。多重比較の結果において、自己中心的動機は無情報、事故との間で有意差が見られ、服従は事故との間でのみ有意差が認められた。また無情報と事故との間でも有意差が認められたが、その他の条件間では認められなかった。

軽視測定では、原因情報条件の主効果と交互作用 ($\chi^2=10.15, df=3, p<.05$) が有意であった。単純主効果の検定結果はまずLowPA群における原因情報条件の効果が有意であった ($\chi^2=18.16, df=3, p<.01$)。多重比較の結果は、Figure 4に見られるように自己中心的動機の高得点者率が群を抜いて高く、自己中心的動機と他の3条件との有意差が見いだされた。

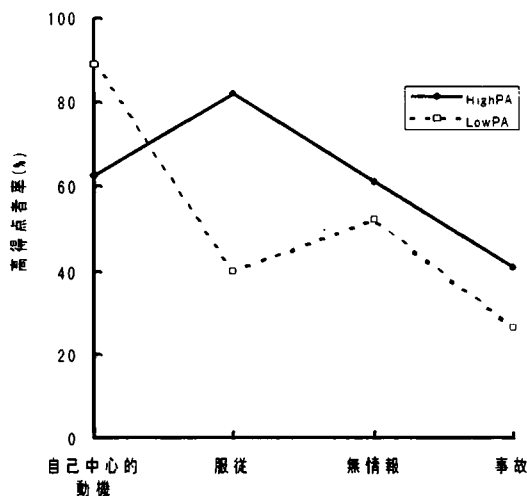


Figure 4. PA得点の高低毎の各原因情報条件群における軽視測定の高得点者率

また自己中心的動機条件群におけるPA得点の高低の効果が有意であり ($\chi^2=3.47, df=1, p<.01$)、LowPA群の高得点者率はHighPA群よりも高い。

さらに服従条件におけるPA得点の高低の効果も有意であり ($\chi^2=6.75, df=1, p<.01$)、逆にHighPA群の高得点者率はLowPA群よりも高い。

相対被害では、まず原因情報条件の主効果が有意であった (Table 4参照)。高得点者率の高い順序は自己中心的動機、服従、無情報、事故であり、自己中心的動機と他の3条件、服従と事故との間に有意差が認められた。またPA得点条件の主効果も有意であり ($\chi^2=9.47, df=1, p<.01$)、HighPA群の方が相対的に高い高得点者率を示した。

b-2. 女性の結果

男性と同様にTable 5に各群における従属測定毎の高得点者率を示した。またTable 6には原因情報条件における各従属尺度の高得点者率と主効果、そして多重比較の結果を示した。

比率の検定結果は、怒り測定では、PA得点の高低条件の主効果のみ有意であり ($\chi^2=7.39, df=1, p<.01$)、HighPA群の方がLowPA群よりも高い高得点者率を示した。

攻撃測定においてもPA得点の高低条件の主効果のみ有意であり ($\chi^2=3.90, df=1, p<.01$)、同様にHighPA群の方がLowPA群よりも高得点者率が高い。

制御能力測定では、原因情報条件の主効果が有意であり (Table 6参照)、高得点者率の高い順序は服従、自己中心的動機、無情報、事故であり、有意差は服従と事故、自己中心的動機と事故との間にのみ認められた。

軽視測定では、原因情報条件の主効果とPA得点の高低条件の主効果 ($\chi^2=4.41, df=1, p<.05$) がともに有意であった。前者における多重比較の結果、高得点者率の高い順序は服従、自己中心的動機、無情報、事故であ

Table 5 PA得点の高低条件及び原因情報条件における高得点者率

従属測度	HighPA				LowPA			
	自己中心 的動機	服従	無情報	事故	自己中心 的動機	服従	無情報	事故
1.怒り	83.3	77.8	66.7	60.0	48.1	64.7	50.0	39.1
2.攻撃	75.0	72.2	75.0	40.0	48.1	58.8	46.4	47.8
3.制御能力	45.8	50.0	16.7	6.7	44.4	52.9	28.6	4.3
4.軽視	75.0	66.7	58.3	12.0	40.7	58.8	32.1	21.7
5.相対被害	70.8	66.7	50.0	13.3	37.0	47.1	21.4	21.7

Table 6 原因情報条件における高得点者率、主効果及び多重比較

従属測度	自己中心 的動機	服従	無情報	事故	df	χ^2 値
1.怒り	65.7	71.3	58.4	49.6	3	n.s.
2.攻撃	61.6	65.5	61.0	43.9	3	n.s.
3.制御能力	45.1a	51.5a	22.7ab	5.5b	3	30.06**
4.軽視	57.9a	62.8a	45.2a	16.9b	3	17.84**
5.相対被害	53.9a	56.9a	35.7ab	17.5b	3	17.82**

**p<.01

注) 平均値わきのアルファベットは、それらが同一であれば平均値間の有意差は見られず、異なるアルファベットが付された平均値間には有意差が見られたことを示す。

るが、事故と他の3条件との間にのみ有意差が見いだされた。またHighPA群の方がLowPA群よりも高得点者率が高いことが示された。

相対被害測度においても原因情報条件 (Table 6参照) とPA得点の高低条件の主効果 ($\chi^2 = 5.14, df = 1, p < .05$) の両方が有意であった。多重比較の結果は制御能力測度と同一であり、高得点者率の高い順序は服従、自己中心的動機、無情報、事故である。有意差は服従と事故、自己中心的動機と事故との間にのみ認められた。加えてHighPA群の方がLowPA群よりも高得点者率が高いことも示された。

考察

分析1においては、大淵(1982)⁹⁷⁾と同様にすべての従属測度において原因情報の効果が認められた。怒り測度と攻撃測度の結果を比較すると、怒りでは4条件間に差が見られたのに対し、攻撃では服従と無情報では差が見られなかった。服従における怒りは自己中心的動機に次いで高い。両親に反対されたという社会的圧力による理由は通常合理的と判断されやすいはずである。しかし制御能力得点において、服従は自己中心的動機と同等な評定がされており、B子には別の行動選択の余地があったと判断されている。したがって欲求阻止者であるB子とその事実をA子に黙っていたという行動選択は、設定の通り怠慢と受け取られ、実質的には不合理な理由とし

て解釈されたと考えられる。だが、また一方で非常に権威的な親に強制されたのかもしれないという可能性の考慮から、無条件にB子を責めるわけにもいかず、攻撃においては無情報と同様の反応が見られたと推測される。

また制御能力測度では、交互作用が認められた。単純主効果の検定後の多重比較の結果では、男性は無情報条件を制御能力の高い事態と受け取り、女性はその逆と受け取っていると考えられる。上記のようにDodge(1980)によると、被害の発生に関して正当な理由が知らされない、人は一般的に不合理な理由を推測する傾向があるという。ならばPA傾向の高い者が情報の少ない事態において特にその傾向が高まり、制御能力を高く評価することで責任を欲求阻止者自身に帰属することはありうると考えられる。また男性が女性よりもPA傾向が高いという瀧村の結果とも一致していることから、この結果は男性のPA傾向の高さが制御能力の判断という認知過程に影響したものと推測される。従って事態の情報の少なさは、PA傾向の高い者の怒りや攻撃よりも、制御能力の判断という認知過程の方に強く影響することが示唆される。

分析2の男性の分析結果においては、すべての従属測度で原因情報条件の主効果が有意であった。また怒りと相対被害の測度でPA得点の高低条件の主効果が有意であった。つまり原因情報が合理的か否かに関わらず、PA傾向の高い者は客観的被害量が同じであっても被害感

が強く、それに伴う感情反応も強いと言える。しかし攻撃測度においては原因情報条件の効果のみが認められたことから、これらの衝動的な被害感や怒りは認知過程において制御され、合理的な理由の場合は攻撃反応が示されにくいと考えられる。

軽視測度では交互作用が認められ、自己中心的動機条件ではLowPA群の高得点者率が高く、服従条件ではHighPA群の方が高いという結果が得られた。さらに単純主効果の検定後の多重比較ではLowPA群において自己中心的動機条件と他の条件との間に差が認められている。つまりこれはPA傾向の低い者は本研究における服従条件のように、情報は与えられているが欲求阻止者の意図が曖昧で推測しにくい場合には軽視されているとは感じにくい、それが明白な場合には、より相手に裏切られ、軽んじられたという感覚を持ちやすいということを示していると推測される。情報が複数あるために意図性が曖昧な状況では、PA傾向の低い者は阻止者が理由を告げず黙っていたという怠慢よりも、両親の反対という社会的圧力の合理性に重きをおいて自分に対する阻止者の先有態度を判断したと推測される。逆にPA傾向の高い者は、悪意の存在をあらかじめ予想しているため怠慢の方により注目し、欲求阻止者の先有態度を否定的に推測したと考えられる。従って服従条件での事態の曖昧さの影響は、無情報による事態の曖昧さの影響と同様に怒りの感情や攻撃反応よりも認知過程に強く影響することが示唆された。

ただしTable 3のように男性の服従条件ではHighPA群とLowPA群の人数の差が特に大きいため、データの分布の悪さが分析結果に影響している可能性がある。従ってこの結果については今後検討を要する。

分析2の女性の分析結果においては、PA得点の高低条件の主効果は怒り、攻撃、軽視、相対被害の測度において有意であった。女性では軽視測度でもPA認知の効果が認められている。さらに怒り、攻撃測度ではPA認知の効果のみ有意であり、原因情報の効果は制御能力、軽視、相対被害という認知過程に関する測度にしか認められなかった。この結果はPA傾向の高い女性は、原因情報の合理性を思考プロセスにおいては考慮しながらも、PA認知の影響のため動因が低減せず、強い怒りの感情と攻撃反応が喚起されたことを意味すると考えられる。

性差に関しては、分析1では性別の主効果はすべての測度において認められなかった。しかし無情報条件において制御能力得点に性別の効果が見られ、男性の得点が相対的に高いという結果を得た。分析2では、怒り、軽視、相対被害において男女共通してPA認知の効果が見

られた。しかし女性は攻撃においてもPA認知の効果が認められている。さらに男性はすべての測度において原因情報条件の効果が認められているのに対し、女性の怒り、攻撃測度ではこの効果が認められていない。つまり男性はPA傾向自体は女性よりも高いが、その影響は認知過程と怒りの感情というcovert水準のものである。女性はそれに加え、攻撃というovert水準でもその影響が認められた。本研究は攻撃の測定に質問紙を用いているので実際の犯罪実行との単純な比較はできないが、瀧村(1991)の結果との類似は指摘できよう。

男性の方がPA得点が高い点、そして怒り、攻撃測度において原因情報条件の効果が男性には見られ、女性には見られなかった点を考慮すると、不快感情の喚起から攻撃反応への過程において、男性はより制御的な認知処理を行って攻撃反応を抑制したが、女性はより自動的な認知処理を行ったため攻撃性が顕在化したと推測される。高い葛藤によって思考プロセスからの注意が逸らされ、制御的認知処理が阻害されることはありうるのだが、少年院女子入院者と女子高校生との比較と異なり、大学生の家庭内葛藤に性差があるか否かは不明であるので、先に引用した瀧村の説明を本研究ではそのまま受け入れることはできない。また本研究では想像物語の登場人物が女性であったために、女性被験者はより感情移入しやすく、高い怒りの感情が喚起されて制御的認知処理を阻害した可能性も考えられる。しかし欲求不満事態の怒りの性差については分析されなかったため言及できない。この点を統制した上、3要因計画で分析するなどして今後検討していく必要がある。

引用文献

- 1) Dollard, J., Doob, L., Miller, N.E., Mowrer, O.H. & Sears, R.R. Frustration and aggression. New Haven: Yale University Press, 1939. 宇津木保 (訳) 欲求不満と暴力 誠信書房 1959
- 2) Rule, B.G., Dyck, R., & Nesdale, A.R. Arbitrariness of frustration: Inhibition or instigation effects on aggression. *European Journal of Social Psychology*, 8, 237-244, 1978.
- 3) Dodge, K.A. Social cognition and children's aggressive behavior. *Child Development*, 51, 162-170, 1980.
- 4) Averill, J. R. Studies on anger and aggression : Implications for theories of emotion. *American Psychologist*, 38, 1145-1160, 1983.
- 5) 大淵憲一 不合理な欲求不満に対する攻撃反応と原因

- 帰属 犯罪心理学研究,19,11-20,1982.
- 6) Dodge, K.A. & Frame, C.L. Social cognitive biases and deficits in aggressive boys. *Child Development*, 53, 626-635, 1982.
- 7) 大淵憲一 犯罪・非行の人格要因 石田幸平・武井慎次(編) 犯罪心理学 東海大学出版会 Pp.183-200, 1984.
- 8) 瀧村美保子 パラノイド傾向と攻撃行動 応用社会学研究(東京国際大学社会学研究科), 1, 61-78, 1991.
- 9) Bower, G.H. Mood and Memory. *American Psychologist*, 36, 126-148, 1989.
- 10) Berkowitz, L. The frustration-aggression hypothesis: An examination and reformulation. *Psychological Bulletin*, 106, 59-73, 1989.
- 11) 大淵憲一 欲求不満に対する原因帰属と攻撃反応 実験社会心理学研究, 20, 175-179, 1982.

参考文献

- 大淵憲一 攻撃性と対人葛藤 大淵憲一・堀毛一也(編) パーソナリティと対人行動 誠信書房 Pp.101-122, 1996.
- 渡辺美保子, 大淵憲一 パラノイド傾向と非行との関係、及び その形成因の検討 日本心理学会第51回大会発表論文集, 708, 1987.
- 渡辺美保子 パラノイド傾向と対人葛藤(1) 日本心理学会第52回大会発表論文集, 159, 1988.

要約

本研究では原因情報の差異と、他者の悪意を予期しやすいという認知スタイル、パラノイド認知が、被害量が

同じである場合の欲求不満事態の怒りと攻撃に及ぼす影響を検討した。方法は、大淵(1982)の欲求不満に関する想像物語を一部変更して使用し、原因情報には自己中心的動機、服従、無情報、事故の4つを採用した。質問は怒り、攻撃など6項目が尋ねられた。またパラノイド傾向の測定には瀧村(1991)のパラノイド尺度の認知的成分を使用した。被験者は386名の大学生であり、二つ一綴りになったこれらの質問紙を施行した。反応はパラノイド得点の高低(2)×原因情報条件(4)の2要因計画の角変換法による検定によって性別ごとに検討された。その結果、以下の点が示唆された。①欲求不満事態においてパラノイド傾向の高い者は相対的に、知覚された被害感が高く、自己に対する欲求阻止者の先有態度を否定的に推測しやすい。それゆえ高い怒りの感情が喚起される。②原因情報が欠如して曖昧な事態では、男性は女性よりも制御能力を高く推測し、個人への責任を増加させる。これは男性のパラノイド傾向の高さを反映したものと推測される。③情報が複数あって曖昧な事態では、男性の高パラノイド認知者は欲求阻止者の先有態度を否定的に推測する。これは彼らが悪意の存在をあらかじめ予期していて、欲求阻止者の怠慢、過失などの否定的情報に注目しやすくなっているためと推測される。④男性は女性よりもパラノイド得点が高いが、パラノイド認知の攻撃反応への影響は女性において顕著である。不快感情の喚起から攻撃反応までの内的過程において男性は制御的認知処理が優位であり、女性は自動的認知処理が優位であるため、overt水準での影響に差が現れたものと推測される。

Summary

The present experiment examined the effects of paranoid cognition and causal information on victim's anger and aggression under frustrating situation. Paranoid cognition is the cognitive style which was defined as overattribute other's negative intent by Takimura(1991). Three hundreds and eighty-six university students were asked to write responses to both frustrating stories and paranoid questionnaire. Each subject received a set of the questionnaire and one of the stories which contained four kinds of causal information. We selected them from two points of view, "arbitrariness of cause" and "ambiguity of situation": egocentric motive, obedience, no information, and accident. The story which contained a cause of obedience was added a negligence factor of obstructor in order to increase ambiguity of her intent. Each response was separately tested by an angular transformation method for the high and low score condition of paranoid scale (2) × the causal information condition (4) for each sex. The result revealed that the high score group of paranoid scores showed a higher anger score than the low score group in both female and male Ss. In the aggression measure, only female Ss showed the same result that an aggression score of the high score group was higher than that

of the low score group. Because the paranoid score of male Ss was higher than that of female Ss, and effects of causal information were showed in neither anger nor aggression measure in female Ss, these suggested that the controlled cognitive processing would function superiorly in male, and that the automatic cognitive processing would function superiorly in female.